様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：３７１０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００４０１

研究課題名（和文）現代アイルランド人作家が描く移民像の変遷とその社会的背景について

研究課題名（英文）A study of the Transition of Images of Irish Emigrants and their Social Backgrounds

研究代表者
河原　真也（Kawahara, Shinya）

西南学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０４５４９２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は20世紀後半以降のアイルランド小説における移民の姿が、20世紀初頭から現在に至るまでどのように変化し、またいかなる社会的要因がアイルランド人作家の想像力に影響を与えてきたのかを、歴史的視点を踏まえて考察したものである。アイルランド移民の実情は、生活苦から逃れ新天地を求めた時期の移民から、より豊かな生活を得るため自発的に祖国を離れた移民まで、その姿は多岐にわたる。そしてアイルランド社会が成熟するにつれ、移民の姿もより等身大に近いものとなり、アイルランド人作家の移民への態度も変容していく。本研究ではアイルランド人作家の負の歴史に対する冷静な視点を読み解き、現代の社会問題と関連づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　アイルランド人作家はローカルな題材をグローバルなものへと変容させることで世界文学としての地位を築き始めたと評価される一方で、いまだに英国との関係やカトリック教会による支配といったものを題材とし、そういった社会の閉鎖的な側面が生み出した「移民」といったテーマにこだわり続けているとの批判もある。本研究ではアイルランド研究にありがちな、感傷的な歴史理解を排除したうえで、アイルランドが抱える負の歴史に正面から向きあう現代作家の姿勢に目を向け、現代の作家が描く移民像の変遷を読み解くことで、作家の歴史認識と20世紀後半以降のアイルランド社会との関連性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examines how the figure of emigrants from the early 20th century to the present in Irish fiction has changed since the late 20th century, and what social factors have influenced the imagination of Irish writers from a historical perspective. The reality of Irish emigrants ranges from those who emigrated at a time when they were seeking a new land to escape the hardships of their life, to those who voluntarily left their homeland to gain a more affluent life. As Irish society matured, emigrants have become more life-size, and the attitudes of Irish writers towards emigrants have also changed. In this study, we read contemporary Irish writers' dispassionate perspectives on negative history and relate them to social issues in the twenty-first century.

研究分野：英語圏文学

キーワード：アイルランド文学　移民　ジェイムズ・ジョイス　アイルランド史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

20 世紀のアイルランド小説において移民が描写されてきた例は数多く存在するが、その多くは米国への移民であった。そして 20 世紀初頭の作品に共通するのは、英国支配下の社会を舞台とし、「植民地」の負の歴史と被支配者の抑圧された声が作品に反映されていた点であろう。例えば George Moore の The *Unfilled Field* (1903)には、移民先の米国から帰郷するも、農村社会の閉鎖性とカトリック教会の理不尽さに辟易し、再び米国へ戻る男性が主人公として描かれている。いわばこの時期の小説に現れる移民像は、英国とカトリック教会という二つの存在に支配されていた当時の社会の閉鎖性と結びついていた。

他方で歴史的な状況を検証すると違った姿が浮かんでくる。20 世紀初頭のアイルランドでは、国外への移民者の数が前世紀と比べて大幅に減少し、移民先も米国から隣国の英国へと変化していく。貧しい農民が棺桶船に乗って米国へ移民するといったステレオタイプは、この時期にはあてはまらないものとなっていたのだ。事実、当時の定期刊行物には、移民を否定的にとらえる論調はなく、むしろ雇用を確保するための「安全弁」として認識されていた。つまり移民の実情と小説の描写が乖離していたとの解釈が成り立つ。

これまでのアイルランド文学研究において、植民地下における「支配」「被支配」という二項対立の構造にこだわる傾向があった点は否めない。北アイルランド紛争が活発化した 1970 年代以降、プロテスタント対カトリックの宗派対立が注目され「搾取されたカトリック信徒」というイメージが定着化する。さらには 1980 年代以降、Seamus Deane や Seamus Heaney、Brian Friel らよって組織された Field Day Group が、ナショナリスティックな創作活動を展開し「被支配者」としてのカトリック教徒という構図を利用した文学研究が確立されるに至った。移民はまさにそれを裏付けるものとしては恰好の舞台装置であったわけである。

だが 20 世紀後半になると、アイルランド情勢の変化や第三世界の経済発展に伴い、移民の持つ意味も異なってくる。1995 年以降、10 年ほど続いたケルティック・タイガーと呼ばれる好景気や北アイルランド紛争の終結(1998)などの出来事が、人々の価値観を大きく変容させたのだ。そして何よりもアイルランド社会が、これまでと異なり、東欧、アフリカ、東南アジアなどから多くの移民､難民を受け入れる側になり､移民に対する認識も激変したと言っても過言ではない。

そのような中で、21 世紀の作家は移民というこの国の代名詞というべき現象をどのように描いているのであろうか。Colm Tóibín の小説 *Brooklyn* (2009) の主人公は、雇用の少ない農村から米国へ移民した若き女性だが、その姿は等身大で描かれ、米国社会で差別される要素はほとんど含まれていない。一方でホロコーストに無知な主人公の描写は、ヨーロッパ史よりも英国との関係史に固執するアイルランドにおける歴史教育の偏狭性を浮かび上がらせている。そういった負の側面を臆せずに描く作家の姿に、アイルランド社会における価値観の変化を読み取ることも可能であろう。このように移民表象の変遷をもとに、アイルランド人作家がこの国特有のテーマ（移民、英国支配による搾取、カトリック教会の権力など）から離れられたのか否か、という問いが本研究の出発地点である。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀初頭から現在に至る移民表象の変遷とその社会的背景との関わりを読み解くことが、現代社会が抱える移民問題を解決する糸口を提示できるのではないか、また Brexit 後のアイルランドと英国との関係を考えるうえで新たな視点が得られるのではないか、という仮説を、アイルランド文学研究において応用・実践することであった。

20 世紀のアイルランド研究において、長年にわたって避けられてきたテーマの一つが、カトリック信徒の中での階級対立といった問題である。英国に支配され、搾取されてきたアイルランドにおいて、一枚岩であるはずのカトリック社会の根幹を揺るがすような事実に、ナショナリストたちは目を背けてきた点はあまり語られることはない。そういったアイルランド社会の矛盾を移民という社会現象にあてはめ、一次資料に基づく歴史状況の検証と作品解釈を行う点は本研究の独自性を示すと同時に、現代社会が抱える移民問題を理解する一助となったはずだ。また祖国を離れたアイルランド系の二世、三世の作家がノスタルジックに描く移民ではなく、アイルランドで生まれ育った作家が描く移民像を考察対象とすることで、あえてローカルな視点から移民と社会との関わりを探り出し、移民像と過去にこだわるアイルランド研究の閉鎖性を関連付けることとした。

この移民表象の変遷を見極めることは、支配／被支配という二項対立に拘るナショナリスティックな研究者が目を背けてきた 20 世紀アイルランド社会の新たな一面をあぶり出すことになり、同時にアイルランド人作家の変化しつつある歴史認識と 21 世紀のアイルランド社会を理解する道筋を示すことになったに違いない。

３．研究の方法

James Joyce や George Moore, Sean O'Faolain, Frank O'Connor らの、20 世紀初頭の小説作品に描かれた移民像を読み解き、そのうえで作品の舞台となった時期のアイルランドにおける歴史的、社会的状況を検証した。特に 19 世紀の半ばに起こり、主に北米へ多くの移民を送る

きっかけとなった「じゃがいも大飢饉」、20 世紀初頭のアイルランド独立運動、独立後疲弊したアイルランド経済といった歴史への認識が国内でどのように生成されていったのか、まずは定期刊行物等から検証する作業を中心に進めた。それを基に 20 世紀初頭の移民像を読み解くことで、一部のアイルランド人作家やアイルランド文学研究者が過去にこだわる理由も明らかにすることができた点は特筆に値しよう。

また上述した時期の作品と異なり、1960 年代以降のアイルランド社会が変容し、さらには移民を取り巻く社会環境が大幅に改善された時期以降のアイルランド小説は、過去よりも未来志向が反映されたものが目立つ。それらを検証するため、Colm Tóibín（1955- ）, Sebastian Barry（1955- ）, Joseph O'Connor（1963- ）, John Boyne（1971- ）らの 1950 年代から 70 年代生まれのアイルランド人作家を取り上げ、彼らが描く移民像を読み解く作業を続けて行った。そのうえで、20 世紀初頭から 21 世紀初頭までのアイルランド小説における移民表象の変遷を整理し、移民を生み出した時期の社会的事象と、それらに対するアイルランド人作家の態度を比較しながら、これまでの英国、アイルランド両国が抱える問題に当てはめて総括を行った。

４．研究成果

(1)【書 評】河原真也、金井嘉彦著『ガラス越しに見るジョイス』（言叢社、2022 年）、読書人、2022 年 9 月 2 日.

(2)【口頭発表】河原真也、「歴史とは悪夢なのか―『ユリシーズ』をめぐるアイルランド史の再検証」（シンポジウム 「『ユリシーズ』批評を探る―アイルランド史とインターテクスチュアリティ」）、日本ジェイムズ・ジョイス協会、2022 年 6 月 11 日、大妻女子大学.

(3)【口頭発表】河原真也、「第 1 部：『ユリシーズ』第 4 挿話―なぜ主人公がユダヤ人なのか」、22 Ulysses―ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』への招待（発起人：田多良俊樹、河原真也、小野瀬宗一郎、南谷奉良、小林広直ほか）、オンライン、2022 年 4 月 1 日.

(4)【項目執筆】河原真也、「1904 年のダブリン」、「アイルランド独立までの道のり」、金井嘉彦・吉川 信・横内一雄『ジョイスの挑戦―『ユリシーズ』に嵌る方法』言叢社、296-299 頁；307-310 頁、2022 年.

(5)【論 文】河原真也、「新たな移民像を描く現代アイルランド人作家の挑戦 ― コルム・トビーンの『ブルックリン』を中心に ―」、『西南学院大学英語英文学論集』60 巻、2 &3 合併号、15-31 頁、査読無、2020 年.

(6)【著 書】河原真也、「フィクションと伝記事実から読み解くジョイスの階級意識」、高橋渡・河原真也・田多良俊樹編『ジョイスへの扉―「若き日の芸術家の肖像」を開く十二の鍵』、英宝社、61-84 頁、査読無、2019 年.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 河原　真也	４．巻 60
２．論文標題 新たな移民像を描く現代アイルランド人作家の挑戦―コルム・トビーンの『ブルックリン』を中心に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西南学院大学英語英文学論集	６．最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 河原真也
２．発表標題 『若い芸術家の肖像』の学校描写にみるジョイスの階級意識
３．学会等名 日本英文学会中四国支部
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 髙橋渡・河原真也・田多良俊樹	４．発行年 2019年
２．出版社 英宝社	５．総ページ数 330
３．書名 ジョイスへの扉：『若き日の芸術家の肖像』を開く十二の鍵	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関